

2022年4月1日

報道関係各位

桜井真樹子（白拍子・声明）

LGBTがテーマの新作・ハイパー能「菖蒲冠（あやめこふふり）」の上演を発表！

新作書き下しの能。能楽師以外のミュージシャンたちによるハイパー（超越したスタイルの）能。
現世の菖蒲の花咲く園で、ふたりの少年が出会う。その夜、彼らは前世の姿、齋王（祭祀に奉仕する未婚の内親王）と官司（宮廷の役人）として出会い、初めて言葉を交わす。齋王は自分の性について官司に告白する。

それは能で語る
LGBT

ハイパー能
「菖蒲冠」

現世で出会った少年たちの
前世の姿は齋宮と官司。
初めて交わすことばが
菖蒲の園で語られる。

眞実は尊し。
男女に悩むことなかれ。

6/4^(土)
生田緑地（菖蒲園）
15:00開場 15:30 開演
料金：3,500円（予約制）

会員優先予約 3/21～、一般販売 3/28～、チケットぴあ 4/4～
ご予約・お問合せ まきこの会 事務局 090-9236-0836

原作・脚本・主演 桜井真樹子

出演 桜井真樹子（少年・齋宮）
吉松章（少年・花苑司）
櫻井元希・金沢青児・柳嶋耕太（地謡）
灰野敏二（ハープ、カンテレ、ポリゴノール、打楽器）

マリン

ハイパー能「菖蒲冠（あやめこふふり）」公式 HP：<https://www.mari-pla.me/makiko-ayamekohuhuri>

<原作・脚本・主演 桜井真樹子より>

●ご挨拶

齋宮（さいぐう）という制度が、12世紀の平安末まで、さらに途絶えながらも13世紀までありました。「齋宮」という場所に、神に仕えるためにという理由で、未婚の天皇の姉妹、皇女である内親王たちが、誰にも接触することなく神聖隔離される時代が、史実によっても、少なくとも680年は続きました。

人間には、どこへ行ってもいい自由、誰と結婚してもいい自由、自分を表現する自由が保障されている、という基本的人権の認識は、日本ではまだ100年にも満たないのです。

私たちは、基本的人権に関して未熟であり、まだまだ認識の過程にいるにしか過ぎません。さらに人々の理解への努力がなければ、あっと言う間に日本の人権の歴史は逆戻りします。

私たちは、人種について考え人権を尊重することすら、未だおぼつきません。

性（自分は女性か男性か）の自認の自由も2000年、21世紀に入ってから、ようやく認識されるようになりました。

日本の古典作品、日本の風習、風俗の歴史を紐解けば、多くのLGBTに生きる人々の歴史があります。しかし、それは決して「表（おもて）」の歴史ではありませんでした。

この作品は、男女の性を越えて、人として恋愛の感情を抱くことの美しさ、そこに芸術的表現が宿ることを証明しようとしています。

「菖蒲冠」は、隠された芸術ではなく、誰もが共感する愛情の美を伝える幽玄（現世を越えた世界）の能の作品です。

●作品・出演者について

桜井真樹子による原作・台本・作曲の新作書き下し。能楽師以外のアーティストとミュージシャンによる「ハイパー（超越した）能」の形式で創作された。

音に内在する生命に耳を傾け続け、導かれる灰野敬二の音こそ、音によって魂を呼ぶことができる。灰野敬二との即興の活動をしてきた桜井真樹子によるシテ（主役）は、幽玄（現世を越えた世界）から訪れる齋王の役。喜多流の能をリチャード・エマートに師事する吉松章は、齋宮で勤める官司（役人）の一つ花苑司（はなぞののつかさ）でワキ（ワキ役）を演じる。

地謡メンバーは桜井元希、金沢青児、柳嶋耕太。中世ヨーロッパの合唱曲を専門としている彼らは今回、能のコーラス「地謡」に挑戦する。さらにヨーロッパの合唱の起源であるオルガスム風新作、15世紀のモテット風新作も担当。最後に桜井真樹子の声明と新作のモテット（ポリフォニー（対位法）による宗教曲のスタイル）を合唱によって日本・ヨーロッパの「中世の祈り」の世界を舞台に繰り広げる。

<公演概要>

■公演日：2022年6月4日（土） 15:00 開演 15:30 開場

■会場：生田緑地（菖蒲園）（〒214-0032 神奈川県川崎市多摩区枡形 7-1-4）

■原作・脚本・主演 桜井真樹子

■キャスト

少年・齋王：桜井真樹子

少年・花苑司：吉松章

地謡：桜井元希、金沢青児、柳嶋耕太

ハープ・カンテレ・ポリゴノラ・打楽器：灰野敬二

■スタッフ・協力

制作：マリプラ

音響：イノックスサウンドデザイン

撮影：白岩善行

デザイン：Diminish Design Partners

●料金・チケットスケジュール：3,500円（全席自由席・予約制）優先予約 3/21～/一般発売 3/28～/チケットぴあ 4/4～

●ご予約・お問合せ：まきこの会事務局（makikoclub2022@gmail.com / 090-9236-0836）

●チケットぴあ：Pコード 511968/興行コード 2211249 /<http://ticket.pia.jp/pia/event.ds?eventCd=2211249>

●出演者プロフィール

桜井真樹子（白拍子・声明）

龍笛を芝祐靖に、天台宗大原流声明を中山玄晋に師事。1997年「もののけ姫」のエボシ御前を見て、白拍子の復元を始める。雅楽の左舞、インドネシア舞踊の「スリンピ」を習得し、全国の中世の舞踊を現地調査し、白拍子の歌謡に振り付けを考案していった。「鬢多々良（びんたたら）」「水猿曲（みずのえんきょく）」「蓬莱山（ほうらいざん）」「廻惚（かいこつ）」など、20年に渡り公演を続ける。また2007年より創作能「マンハッタン翁」「橘の姫」「岸边の大匠」などを発表。2019年よりハイパー能「睡蓮」「投石」を発表する。

まきこの会 <https://www.mari-pla.me/makikoclub>

ホームページ <http://www.zipangu.com/sakurai/>



灰野敬二（はいの・けいじ）

1952年5月3日千葉県生まれ。アントナン・アルトーに触発され演劇を志すが、ザ・ドアーズに遭遇し音楽に転向。ブラインド・レモン・ジェファーソンをはじめとする初期ブルースのほか、ヨーロッパ中世音楽から内外の歌謡曲まで幅広い音楽を検証し吸収。1970年、エドガー・アラン・ポーの詩から名を取ったグループ「ロスト・アラーフ」にヴォーカリストとして加入。また、ソロで自宅録音による音源制作を開始、ギター、パーカッションを独習する。1978年にロックバンド「不失者」を結成。1983年から87年にかけて療養のため活動休止。1988年に復帰して以来、ソロのほか不失者、滲有無、哀秘謡、Vajra、サンヘドリ、静寂、なぞらない、The Hardy Rocksなどのグループ、experimental mixture 名義でのDJ、他ジャンルとのコラボレーションなど多様な形態で国際的に活動を展開。ギター、パーカッション、ハーディ・ガーディ、各種管弦楽器、各地の民間楽器、DJ 機器などの性能を独自の演奏技術で極限まで引き出しパフォーマンスを行なう。200点を超える音源を発表し、確認されただけでも1,800回以上のライブ・パフォーマンスを行なっている。

<http://www.fushitsusha.com/>



撮影：鈴木和倅

吉松章（謡、舞）

舞台俳優として活動中、リチャード・エマート先生に喜多流の謡と舞を習う。能楽の謡や舞を現代的に解釈し、舞台化。「パタヤの売春婦」「マッチ売りの少女」等がある。

音楽詩劇研究所公演では、東京、ロシア、アルメニア、カザフスタン、韓国にて、謡と舞を使ったパフォーマンスで参加。



櫻井元希（指揮者・歌手）

広島大学教育学部第四類音楽文化系コース、東京藝術大学音楽学部声楽科を卒業。同大学院古楽科をバロック声楽で修了。声楽を枝川一也、益田遙、河野克典、寺谷千枝子、櫻田亮の各氏に、バロック声楽を野々下由香里氏に、合唱指揮をアレクサンダー・ナジ氏に、指揮を今村能氏に、古楽演奏を花井哲郎氏に、ヴォイストレーニングをVocology in Practiceの小久保よしあき氏に師事。

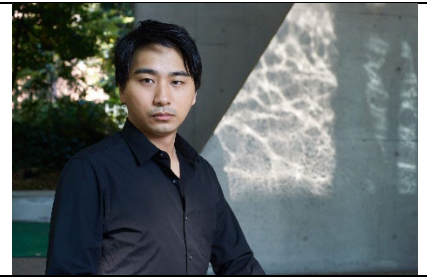
Salicus Kammerchor、Ensemble Salicus、Chor Eleusisを主宰。フォンス・フローリス古楽院講師。東京藝術大学バッハカンタータクラブ2013-2015年度演奏委員長。ヴォーカル・アンサンブル アラミレ、リーダー。emulsion、Ensemble XENOS、The Cygnus Vocal Octet、ジャパントーンワークワイア、ヴォーカル・アンサンブル カベラ、古楽アンサンブル コントラポント等に所属。



金沢青児 Seiji KANAZAWA

東京藝術大学大学院修士課程（独唱専攻）在学中の2017年、藝大フィル合唱定期演奏会にてバッハ《ミサ曲口短調》のソリストを務める。修了時に大学院アカンサス音楽賞を受賞。

古楽アンサンブル コントラポントやヴォクスマーナの定期公演に参加するなど、バロックから現代音楽まで幅広く活躍、新作初演・日本初演も多数こなす。



柳嶋耕太

合唱指揮者。ドイツ・ザール音楽大学指揮科卒業。2015年にドイツ音楽評議会・指揮者フォーラム研究員に選出され、ベルリン放送合唱団をはじめとするドイツ国内各地の著名合唱団を指揮。2017年秋完全帰国。以来、vocalconsort initium、室内合唱団 vox alius、横浜合唱協会をはじめとする多数の合唱団で常任指揮・音楽監督を務めるほか、(株)コーラスカンパニー主催の合唱指揮講座講師を務めるなど後進の育成にも力を入れる。合唱指揮をゲオルク・グリュン、指揮を上岡敏之の各氏に師事。ザールブリュッケン室内合唱団、アンサンブル・ヴォカベラ・リンブルク、エマルシオン、サリクス・カンマーコアなどに所属するアンサンブル歌手としても活動を広げる。



<あらすじ>

前幕

水田にも畑作にもならない土地を主人は、菖蒲を植えて、五月下旬になれば、菖蒲咲く池をと、人々の憩いの場所にした。そこで働く一人の童子（男の子）が、様々な種類の菖蒲を育て、世話をしている。

そこに今年、初冠（ういかんむり；元服をして成人になると、冠をつける。その元服の儀式の時に初めて冠を着ける儀式のことをいう）の少年が、この冠を菖蒲の花で飾りたいと、童子に語りかける。

童子は主人から、五種類の菖蒲を採ってもよいと許しを取り、二人で菖蒲を選び出す。

最初は「君のような菖蒲だね」とお互いの美しさを喩える菖蒲を選ぶ。そして二人の気持ちが合わさった菖蒲を選ぶ。最後に童子は、美しい王女であった王昭君の名を持つ菖蒲を、初冠の子にふさわしいと選ぶ。

その五つの菖蒲を冠にさして、池に映った初冠の子の姿は、まさしく王女、さらに神に仕える斎王（いつきのみこ＝さいおう）の姿だった。

初冠の子は、その姿を見て「私は王女です」と言う。

後幕

童子の前世は、斎宮（さいくう：斎王の住んでいる宮殿、と言っても斎宮は菖蒲の生える湿地帯であり、誰も住もうとしない土地に伊勢の斎宮は建てられている）の庭の手入れを任される花苑司（はなぞののつかさ）だった。斎王の姿を見ることなど、ありもしない。しかし、斎王の心を慰めるため、多くの花を庭に植え、五月には菖蒲の池を精魂込めて作っていた。

そこに初冠の子の前世、斎王が現れる。

来世で童子と初冠の子は、初めて出会い、夢の中で前世としての花苑司と斎王は初めて出会う。

斎王は、花苑司に、彼の育てた菖蒲に心を慰められたことに礼を言う。

しかし、斎王は天皇である父が亡くなったと同時に、祓川に映る月影を追って亡くなった（入水自殺をした）。

「なぜそのような悲しいことをしたのですか？」と言う花苑司の重ねて尋ねる心に、斎王は遂に、「自分は男であるが、父は、私が女の子のように振る舞う姿を見て、斎王として、人里離れ、独り身を続け、生きていく慈悲を私に与えた。」と、前世で誰にも言わずに死んでいったことを、告白する。すると、天夜は光に満ち、そこに仏が金色に輝いて現れた。

真実を告げる人こそが、仏を感涙させる。それは仏に目覚めた者（正覚者：悟りを開いた者）である。

現世（生きているものたちの世界）を取り巻く妄念を放たれよ。万物一体の真理は、平等の障碍（しょうがい：悟りの邪魔となるもの）なき正念より起こるべしと。

阿弥陀經にも池に咲く蓮は、青、黄、赤、白とそれぞれの色に咲く、そこに優越はない。

まさに蓮の蕾が開く時（夜明け）と共に、二人の夢は消えてゆく。

■本件に関するお問い合わせ先

まきこの会 運営・制作 マリプラ（担当梅田）：info@mari-pla.me / 090-9236-0836